

謹慎二日、減俸（一カ月給料半額）、兵は七日間の重
営倉であった。しかし、公用行李の鍵保管の曹長、暗
号手は不問に付された。

暗号解読の恐ろしさは、今次の大戦においても、外
務省より駐米大使宛の電文は解読されていて、日本の
手の内は米国に筒抜けであったことでもわかる。ま
た、連合艦隊司令長官山本五十六大將機の南方での撃
墜事件も、海軍の暗号が解読されたことが一因という
ことを戦後聞いた。暗号兵として陸軍にあった私とし
ても、暗号書の大切さを今更ながら思い知らされ、そ
の重要な任務にあったことを秘かに誇りと思ってい
る。

終戦を知らず北満で戦った

第百七師団歩兵第百七十七連隊

岩手県 小林 謙 一

もう既に五十数年も前のことである。狼の遠吠えす
る満州の広野に、あるいはソ連チタ地区チェノスカヤ
の地に、無念の死を遂げて屍は文字通り草むしている
戦友の御冥福をお祈りすると同時に、当時の悲劇を記
憶をたどってお話をしたい。

私は昭和二十年二月十日、青森県弘前の北部第十六
部隊に現役兵として入隊した。同級生三人は共に入隊
したのだが、うち二人は戦死してしまった。

二月の弘前は岩手県より寒さが厳しく、雪も多い。
起床と同時に舎外で点呼。当時は兵舎の窓まで積雪が
あり、全員での雪踏みが一週間の日課であった。真新
しい軍服を着用して気分は軍人であると自覚をし、一

週間の訓練を終えていよいよ出発である。

東北線經由一路満州へ、途中B 29の爆撃に遭いながら九州博多駅へ着く。一泊後、十時頃、「景福丸」という三千トンぐらいの貨物船に乗船し博多港を出帆。

夕方、朝鮮釜山港着、夜行列車にて満州徳伯斯着、第百七師団歩兵第七十七連隊（第二〇一部隊）菅中隊に入隊した。

五月まで教育を受け、菅中隊は五叉溝口に移駐したが、私は第九中隊（直江隊）に配属となった。

七月、中隊は陣地構築のため、「日ノ出山陣地」に移駐した。私たち十人は衛兵要員として部隊に残留、挺進大隊が第二〇一部隊の兵舎に移駐した。毎日衛兵を勤務したがその間加藤軍医大尉の当番を兼務した。

七月末、加藤軍医と共に日ノ出山陣地の中隊に移駐勤務。ところが、八月九日早朝、ソ連機が低空飛行で陣地攻撃をしかけて来た。激しい機銃掃射である。我が軍にも飛行機があると思つて上空を見たところ、星の付いた飛行機であった。ソ連軍と戦闘状態に突入したことが判つた。

我が第三大隊第九中隊は武器・弾薬・糧秣の補給を受け背のうに入れ完全軍装をした。私は十一年式軽機関銃手として夜を徹して興安嶺を目標に南下する。八月十四日、西口の戦闘に参加、第一、第二大隊は先発隊として前日より戦闘参加し、損害が大であると聞く。銃砲弾の音が激しい前方を見れば、斜面を散り散りに友軍が下山する姿が見られる。

我々中隊は麻畑の中に入る。不安のうちに夜になる。右から、左から、前から、向こうから照明弾、曳光弾がソ連側より打ち上げられまるで真昼間のように、我々の行動を妨げている。私達の右側にいた速射砲が敵戦車に対し射撃を開始した。まさに百発百中で敵戦車数台が撃破された。

他の中隊が、敵陣目掛けて夜襲行動を起こすが目的を果たせない。部隊は西口を脱出する予定であったが、当日は大雨のため脱出突破の機会が無く、各中隊は離れ離れになり朝方突破に成功出来た。敵の攻撃は激しく、我々は包囲され、死傷者は続出の状態で、四方を見ても生存者は皆無の惨状であった。その中を中

隊員十七人が大興安嶺山中に逃避することが出来たのである。その間の二、三日間は少々の米と乾パンで空腹を幾分しのいだのであった。

その後は、夜は先進部隊の捨てた物品を利用しながら、夜営、行軍を続けた。少々の塩を大切にしながら、山中はアマトコロの根、畑へ出た時はトウキビ、芋、ささげ、南瓜、瓜、大豆、何でも手あたり次第食べた。そのため下痢に悩まされ、雨に打たれながらの強行軍である。昼は敵に発見されない所で休憩する。夜はチチハルを目標に東へ東へと中隊を探し求め、一週間歩き続けた。

その間、幾度か民家に泊まり、食を求めながら敵の襲撃に遭い、傷ついた戦友を助けながら行軍をしたが、途中二人の戦友が行方不明になるなど、疲労は極度に達し地獄のようであったが、ようやく奇しくも本隊と合流することができたのである。

八月二十四日から二十五日頃だと思いが、五什台でソ連兵と遭遇し激烈な戦闘をした。私達の小隊は歩兵の傘形散開で前進することが基本であるので、一番は分

隊長、二番は軽機関銃射手として匍匐前進する。夜間は小銃手以外は不利である。銃を発射する際は火を吐くので敵の目標になる。我々は月が輝き、満月の光に照らされ、敵は小高い丘に布陣しているので、敵からは丸見えでまったく不利な状況であった。

いつしか銃声も止み、無気味な静かな時間が過ぎた。直江中隊は中隊長をはじめ多数の戦死、負傷と犠牲者が続出していった。前進の時は激しい弾雨も恐ろしいと思うこともなく懸命であったが、反対に撤退の時は戦場は修羅場と化し、地獄そのもので、言語に絶する悲惨さである。

ソ連軍との戦いは、どのような闘いであったかを、具体的に表現に出来ないが、その後も戦闘を繰り返して大興安嶺を踏破し、音徳爾（イントル）において村落露営をした。

八月二十九日朝、飛来した日本軍用機から終戦を告げられ、武装解除となり兵器をソ連軍に引き渡した。九月二十九日、これから先、嚴寒零下四〇度、粗悪な

食糧、衣住欠乏、疲労、労働、医療不足・不備な地に強制留置されるとは誰一人想像したであろうか、私自身も夢想だにしない一人であった。

その後、行軍露営をしながら一週間、食糧のある元の駐留地徳伯斯にソ連兵に警護され戻った。物品の略奪は日常茶飯事、私も時計・万年筆を略奪され、涙の日々を過ごして内地ダモイを待ったのである。

十月末頃、チチハルへ行軍で移動、集結地にて一五

〇〇人の作業大隊が編成され、二段式貨車に乗車、「東京ダモイ」と言われてチチハルを出発した。列車は満洲里を経て西へと進む。我々の思った東の方ではないため、皆顔を見合わせた。

貨車の中は大変寒い。朝晩は零下三〇度ぐらいとソ連兵は言う。貨車の中で食糧のパンの配給があった。

副食も無く水が少々配給になるだけ。特に生理現象等に大変苦勞しながら、厳寒のシベリア鉄道で西へ進行、到着した駅はチタ州郊外のチェノスカヤ収容所第十四大隊である。大隊長は加藤少佐であった。

到着したのは、十一月三日、積雪一〇ミリ、気温零

下十五度ぐらいと思う。チェノスカヤは炭鉱町である。四カ所だっと思うが小高い丘に炭鉱があった。

その近くの傾斜の丘に私達の兵舎が建築されていた。

土の中に半分入り、屋根と窓が外から出ていた。中は二階作りになって通路の両側はベッドとなっている。

両側入口は階段で、両側にベーチカがある。寝具は毛布二枚だけ、その他の衣類は着替えなし、夜は大変寒かった。

炭鉱で労働する前は土木作業その他何でも労働させられた。食糧は少なく、よくぞ生きて帰れたと思う。

当時の食糧のことを考えると、そのことを書いたり、話をする気になれない。風が十メートル吹くと体感温度は零下七〇度になるといわれていた。

厳寒での衣食住の困難と過勞、それに虱、蚤、南京虫、それに加えて凍傷等、慘憺たる苦難に耐える三カ年間であった。栄養不良と発疹チフス、回帰熱の発生のため兵舎にて看病の仕事を三カ月ぐらいした。

炭鉱労働者一五〇〇人中、五〇〇人は発病したと思う。昭和二十三年帰国まで、十四ラーゲルは病氣、そ

他の事故にて六〇パーセントぐらいが死亡したとも聞いている。私と広島県出身の兄弟以上に親しくお世話になった戦友は、二人とも元気に帰国出来たので、手紙、電話等で親交を深めていたが、一昨年私が広島県まで訪ねて行き五十年振りで再会して来たが、再会の時は言葉にならなかつた。只々、お互い元気でいたことに万感胸に迫り、私も言葉も出なかつた。今後もし生ある限り親交を深めていくつもりである。

炭鉱の仕事は、外より坑内に通じる坑道掘りであつた。ロシア人一人と私達二人、三人でのノルマは三メートル×三メートル、高さ三メートルすると百パーセントであるので、ダイナマイト二〇発を仕掛け、石炭一トンを台車にて一五台、支柱三組を組む。これで一日の仕事を終えるのである。

ノルマ達成で食糧が少々多くなつた。なお賃金も二年目頃より一〇〇ルーブル支給になつた。私達は普通食は黒パン支給、白パンとタバコを買つた残金もあつたが、帰国の際日本人が鉄道近くで働いていたので列

車から渡してやつた。一緒に働いていたロシア人（タワレス）は友人として大変世話になり、パンなどを恵んで頂いた。今頃も元気でいるのか、健康を祈っている。

炭鉱は一週間の交替制で、一番は午前八時〜午後四時。二番は午後四時〜午前零時。三番は午前零時〜翌朝八時までである。二・三番は暗い時間で寒い、そのために腹が冷えるので辛かつた。民主主義（共産主義）運動の教育は強制的で大変であつた。兵舎内に共産党史が備え付けてあり、勉強を強要され、これに不熱心な者は反動者として人民裁判が施行された。国際赤十字による家族あての手紙を出す機会があつた。家族から返信があつた戦友も少々いたが、私達の所へは何もなかつた。

シベリアで三回年を越したので戦友達は皆帰国を諦めていた。スターリンの肖像画を見ると、誰も悪口を言つていた。私も民主グループに摘発をされ、人民裁判を受けたことがある。このようなことで私のダモイ（帰国）が延びたことであらうかと思つてた。

昭和二十三年七月、ダモイ列車に乗れという命令が突如きたので、また嘘だろうと思って列車に乗った。ところが列車は本当に東へ進行する。今度は本当かと思いつながら、着いた所が夢にまで見たナホトカ港であった。船が遅れていると十日間ぐらい滞在した。忘れもしない昭和二十三年八月二十三日、「信濃丸」に乗船、八月二十五日、懐かしの故国の港舞鶴に上陸し帰国した。

終戦以来五十数年が経過した。第十四大隊ラーゲルで栄養失調、発疹チフス、回帰熱で死亡した戦友、入隊以来苦楽を共にした戦友の御霊に対し合掌をいたします。

一五〇〇人中六―七割近く死亡したことは、このラーゲルでの待遇、環境、労働、食糧、寒気対策などがいかに悪かったかを証明するものである。病院もなく、一ラーゲルに軍医一人で診断・治療など行ったが、医薬品は不足しており、ソ連軍の配下であるため思うようにいかなかったのだと思う。ここにも敗戦の悲劇があった。

兵舎内で朝起床してみれば左・右の戦友が亡くなっていた。先ず、兵舎は半地下式のため、階段の入口に裸で安置していたのだが、線香も無い。死亡者が五、六人になると馬車一台に積んで墓場へ運ぶのだが、墓も何も無い広野である。厳寒零下四〇度となれば土は石のように凍っているから硬くて掘ることは出来ない。死体は五、六体ぐらいの穴の部分に石炭を燃やして終日埋める。これが毎日の労働であった。

この場合、零下四〇度の厳寒なので掘った土もすぐ凍り、五、六人埋葬した分に覆土する上がない。そのため雪と土を混ぜて埋葬終了となる。私共もいつかこのような運命になるのかと語り合いながら、供物も線香もなく、暖をとった焚火の煙だけで、唯々手を合わせて冥福を祈るのみであった。

チェースカヤの広野に収容所が四カ所ぐらいあると聞いているが、戦友が何千人と故国に帰ることを夢に見ながら亡くなっていった。このことを思うと五十三年前が昨日のように眼前に映る。

新聞、テレビ等で戦友の墓が放映されているが、良

く整理された場所に墓参団が参っている。果たして戦友が眠る何百カ所の墓地が全面的に整理・整備されているのだろうか。もし整備されていないのならば、同じ生活を共にした戦友として、ソ連当局に猛反省を求める。私は母国の土を踏んだ喜びは筆舌に尽くせぬ想いであったから、亡き戦友の御霊に対し心から御冥福をお祈り申し上げる。

【解説】

☆第七師団

関東軍第四十四軍関東防衛司令部は昭和二十年五月三十日、新たに第四十四軍の戦闘序列を令せられ第三方面軍戦闘序列に編入された。第七師団（咫）は第四十四軍隷下部隊である。

臨時編成 昭和十九年六月二十七日、編成地 満州、補充担当 弘前、終戦所在地 索倫。

第七師団は満州から基幹となる諸師団が南方に転用され、その穴埋めの意味で昭和十九年五月（六月臨

時編成完）アルシャン駐屯隊と独立混成第七連隊を基幹とし編成された。

八月九日ソ連進攻時、師団主力はアルシャン南東五〇キロの五叉溝に陣を構えていたが、第四十四軍から撤退命令を受け後退しようとした八月十二日には、既にソ連軍に包囲され退路も遮断されていた。

師団は退路をふさぐ西口のソ連軍に対して攻撃を行い、いったんはソ連軍を撃退したが、間もなく火砲による逆襲を受け死傷者が続出し、北部の山岳地帯に退避せざるを得なかったという。

八月十五日、山中をさまよひ孤立無援となった師団に終戦の報は届かなかった。

二十五日、師団は音徳爾西方四〇キロでソ連軍と遭遇し、この部隊を撃退した。この頃、満州各地では日本軍の武装解除が行われており、ソ連軍は師団規模の部隊の出現に驚いた。直ちに関東軍司令部に対して第七師団を停戦させるよう要請し、関東軍の参謀二人が派遣された。

二日間の搜索の末にようやく師団と接触した。関東

軍参謀は師団に停戦命令を伝え第百七師団は矛を収めた。

満州・中支と転戦

鉄道第三連隊

秋田県 熊谷繁雄

私は大正十一年二月、九人兄弟姉妹の次男として秋田県仙北郡の鍛冶屋の家に生まれた。働き手は父、叔父、兄、私の四人で、鋸の製造が専門で、その他、山仕事に使用する諸道具から鋏・鎌等の農具、家庭金物類の販売もする何でも屋であった。

昭和十六年五月二十二日、皇紀二千六百年と青年訓練実施十五周年記念の年とのことで、全国青年学校生徒の御親閲に参加したことは大きな思い出である。私私が豊川村より代表者として天皇陛下の御前を分列行進したのである。全国より約三万五千人の勤労青年が、宮城二重橋前に参集しての一大行事であった。

昭和十七年六月、私の母校である角館町小学校で徴兵検査を受けた。簡単な学科試験と身体検査を受け、徴兵官の中佐殿の前に進み「甲種合格」と言われた第一号であった。しばらくして役場の兵事係が来られ、秋田連隊区よりの籤だと言って一本の「紙より」を渡された。それには「鉄道兵一番、在外部隊」とあった。その夜の夕食の時に兄が、「俺と同じ部隊かも知れぬ」と言った。兄は昭和十三年徴集（大正七年生まれ）で、旧満州国ハルピンの鉄道第三連隊で、ソ満国境の満洲里で三年間勤務し、昭和十六年の暮れか十七年の初め頃満期除隊をした。

昭和十八年一月十日、千葉市の鉄道第一連隊（東部第八十六部隊）に関東軍要員として入隊し、材料廠中隊（特科隊）に配属であった。教官は松田中尉、助教南雲軍曹、上田伍長が内地の集合教育係と初年兵受領者を兼ねておられた。上田伍長は満州ハルピンの鉄道第三連隊より来られたそうである。

初年兵約六十人が二個班に分かれての集合教育が行